目の冒険

錯視の話⑥

ゆがみは錯覚、だましは矛盾

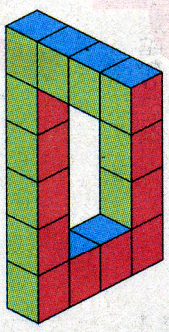
北岡　明佳

「百聞は一見にしかず」ということわざがある。英語ではSeeing is believingという。その駄じゃれで、Seeing is deceivingというのがある。見るとだまされる、という意味で、錯視のことである。この駄じゃれは日本語にうまく訳せないので、筆者には特におもしろくない。

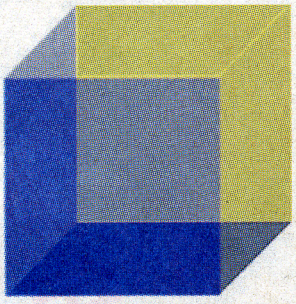
日本語でも英語でも、おそらく他の言語でも、「錯覚」というと「だまし」を連想する。「だまし」という概念は「意図的に他者の知覚・認識をゆがめること」なので、意図性を持たない錯視とは異なるはずであるが、「だまし」の概念を広く取り、意図性さえ抜いてやれば、錯覚・錯視の概念と矛盾しないとも言える。

このように錯覚とだましは混同しやすいのと同様、錯視図形とだまし絵を混同する人も多い。筆者の意見では、錯視図形は生存の役に立たないゆがんだ知覚を図示したもので、だまし絵はほとんど正しい知覚を得るようにできているが、一部が矛盾している図形である。

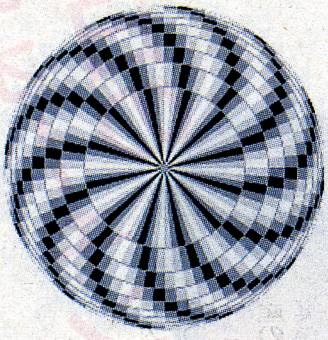
1



2



3



たとえば、1のような図形は実際にありそうだが物理的には不可能である。このような図形は不可能図形と呼ばれ、だまし絵の一種である。

2では、青色の正方形面が左下で手前に見える場合と、黄色の正方形面が右上で手前に見える場合とが交代して見える。このような図形を反転図形あるいは多義図形と呼び、これもだまし絵のカテゴリーに入る。

3は一応錯視図形である。灰色の同心円が渦巻きに見える。これは渦巻き錯視という形の錯視である。しかし、ヨーヨーのように立体的に見える効果の方は、はたして錯視なのであろうか、あるいはだまし絵なのであろうか……。

（立命館大助教授）

1「心的回転研究用不可能図形」2「ネッカーの立方体・透明版」3「ヨーヨー」（いずれも筆者作）